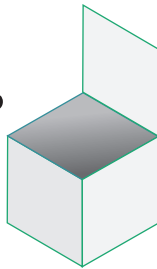


感想の小箱

AI時代における「国語」について考える



今までにないテーマで今回はお届けします。

日本語が「高文脈文化」というのはご存じかと思います。文脈に依存し、少々の省略があっても伝わる、また比喻などのメタファー表現、「察し」を言葉の中に込められる、これが日本語の良さではないでしょうか。しかし、AIはグローバル環境で作られており英語を始めとする「低文脈文化」、つまりこれはこうだとはっきりと言わないといけないという日本語とは真逆のスタンスになっています。

ここを気づくのが遅れ、「あれ」「これ」「それ」などを安易に使ってAIがどこを指しているのか見失ったり、同音異義語で別の意味に取り違いをされて質問し直しというケースが多々あると思います。

正直、日本人同士でAIが求める会話をリアルでやろうとすると「説明がクドく、冗長な話しか出来ない人」扱いになってしまうでしょう。しかしこれがAIだと最適解になるから奥が深い。つまり、日本人同士が会話で喋る日本語とAI相手に使う日本語の組み立て方を明らかに別個のものとして意識していかなければいけない時代に突入しました。

かといって、「高文脈文化」とAIの相性が完全に最悪かと言われるとそうでもなく、どうしても質問したいけど、これセンシティブなラインかなあ、直接質問するとアウトかもという時に比喻や暗喩や匂わせ表現で聞いてみて、AIに答えを貰えることがあります。これは日本語のメリットだと言えるでしょう。

T-LEVEL

profile T-LEVEL

ずーっと岡山県在住。

映画、ラジオ、PC&スマホガジェット、旅行、スポーツ観戦、食などなど、その時自分のアンテナに引っかかったものを感想の小箱として発信！



月の出ぬ間に

私的オジー・オズボーンの思い出と
ヘヴィ・メタルについて（短縮版）

紫水DANNA勇太郎/居待月

2025年7月23日の昼頃突然、突然届いた知らせ。
「オジー・オズボーンが亡くなったー！」
衝撃だった。だってつい先日の7月5日に最後のライブを成功させたばかりだったから。
あー「オジー・オズボーンって誰？」という方もいますかね？ ここでは分量が足りないのでは非ググってください。とにかくメタル界にとってもっとも大切な一人と言えます。
とか言いつつ実は当時（彼がソロで活動を始めた頃）は、けっこう嫌いだった。あのポッチャリ体型、ガニ股で両手を高く上げてするバンザイ・ピース。前屈みになって両手をぱちぱち叩くアクション。そしてコウモリ食べるとか喧伝された彼のパフォーマンス。
「これはギャグなのか？」と、ずっと思っていた。

しかしランディー・ローズ、ジェイク・E・リー、ザック・ワイルドといった、とてつもないギタリストを見出して生み出した楽曲の素晴らしさは、その考えを改めるのに充分過ぎたし、またいつしか、ヘヴィ・ローテーションで聞くようになっていた。
そしてその後「オズ・フェスト」等でメタル業界全体の盛り上げと共にさらなる後進の発掘もやってみせる。ひよっとしたらこれまで一番メタルに貢献した人と言っても良いのかもしれない。それくらいの偉人だと思うのだ。
この話は正直尽きない。ロング版は改めてSpinartにでも書こうと思うけれど、まずは心からの感謝を込めて。 R.I.P...



profile 紫水 DANNA 勇太郎

あらゆるジャンルの表現者・アーティストと出逢えるサイト「Spinart-スピナート」運営。

ミュージシャンとしても音楽作品を各種サブスクメディアでリリース中。

愛うさぎ「うみ」のYouTube 動画「うさぎのうみちゃんねる」のおじい。

Web 戦略企画制作、Web・SNS 関連著書多数、スタッフ育成、Web 運用セミナー講師、等。

詳細プロフィールや連載記事はこちらをご覧ください。

<https://www.spinart.jp/contents/writer/utaro-shimizu.html>